

聖心女子大学 聖心女子大学論叢 第98集 抜刷 2002年1月

生涯にわたる人間関係の測定

—ARSとPARTについて—

高橋 恵子

## I 問題

本稿では、乳児から高齢者までの人間関係を測定するために筆者が開発した ARS (Affective Relationships Scale, Takahashi, 1974; 1990a; Takahashi & Sakamoto, 2000) と PART (Picture Affective Relationships Test, Takahashi, 1978~2000) について、その背景としている理論と測定具としての妥当性や信頼性ととも述べる。人間関係にはポジティブなものから、ネガティブなもの、ポジティブな関係にもごく親しい関係から社会的な役割を基盤にしてできる関係まで多様なものがありうる。ARS と PART が扱う人間関係はポジティブな感情を交換したいと願う、人間関係の中核をなす親密な関係である。ARS と PART は筆者の人間関係の理論 (高橋, 1973; Takahashi, 1990a) に依っているものであり、ARS は中学生から高齢者までに、PART は質問票形式の ARS が使いにくい乳幼児から小学生、そして、高年齢者に対して使用されるものである。すなわち、ARS と PART は同一理論に基づいて生涯にわたる人間関係の内容が記述できる測定具である。

### 1. 人間関係の特質

人間は社会に生まれ、社会のメンバーとして生涯を過ごす。内外の多くの研究は、乳児はもとより成人においても、生存や適応にとって親しい他者との良好な関係が欠かせないことを明らかにしてきた (e.g., Bowlby, 1969/1982; Cohen & Wills, 1985; Hinde, 1981; Sarason & Sarason, 1985; Weiss, 1974)。そして、この人間の適応を支える人間関係が数人の重要な他者からなるというコンセンサスもすでに得られている (e.g., Carstensen, 1992; Kahn & Antonucci, 1980; Levitt, Guacci-Franco, & Levitt, 1993; Lewis, 1982; Takahashi, 1974; 1990a)。しかし、これまで、数人の重要な他者からなる人間関係をうまく記述する方法がなかった。それを試みたのが、ここに述

### Assessing Close Relationships across the Lifespan : Constructing and Validating the ARS and the PART

This article proposes new instruments for assessing close social relationships, an Affective Relationships Scale (ARS, for adolescents and adults), and a Picture Affective Relationships Test (PART, for children and elderly people) that demonstrate validity and usefulness among people of both genders and from young childhood to old age. After discussing the problems associated with previous instruments for assessing close relationships, the rationale behind the ARS and the PART are described, and studies that have been conducted to establish its validity are presented. It is shown that the new measurements could not only reflect normative properties of close relationships, but that they could also shed light upon previously neglected aspects of social relationships, i.e., individual configurations of relationships.

べる ARS と PART である。

われわれが「数人の重要な他者を持つ」という事実は、以下のふたつを前提としてはじめて成り立つと考えられる。第一には、その数人の重要な他者間には人が果たす数種の心理的機能—生存を支えるような重要な機能から、喜びや情報を交換したりのような周辺的な機能まで—についての分化があるはずだということである。特定のだれかがすべての心理的機能を十分に果たすのは無理である上に、誰かに全面的に依存することになり、自立的に生きる点では健康とはいえない。その上、その対象を喪失することで全てを失うことになるのは危険が大きすぎるであろう。つまり、「数人の重要な他者を持つ」ということは、それぞれの対象にそれぞれの心理的機能がわりふられた、互いに機能分化された数人の他者があることが前提となる。他者がそれぞれ必要な機能の一部しか果たせないからこそ、複数の対象をわれわれは必要としているにちがいないと考えるのが自然である。そして第二の前提は、それぞれの個人が自分にとって必要な機能を果たす他者を選んでいるとすれば、それぞれの人が持つ人間関係には人間間で差異があるはずだということである。

つまり、人間関係の測定では、「心理的機能が分化した数人の重要な他者からなる」という事実と、それぞれの個人が自分にふさわしい人々を選び、自分なりの人間関係を構築しているために出現する「個人の特徴」とを、記述しなければならないことになる。そのためには、人間関係の測定では、選ばれている他者、つまり“対象”と、その対象が担っている“心理的機能”とを関連させて扱う必要があることになる。そして、それぞれの人が“対象”と“心理的機能”とを関連させて選んでいる人間関係は、人それぞれで異なるであろうということになる。

したがって、多くの先行研究がしてきたように、特定の対象（多くは、それぞれの年齢群でもっとも目立つ対象、たとえば乳幼児期では母親、青年期では友人）や特定の機能（たとえば、母子間の愛着や友だちとの関係）だけをとりあげるのでは十分とはいえないことになる。それでは人間関係のごく一部

を切り取っているに過ぎないし、それでたとえば発達や他の行動との関連を見ようとするのは望ましいとはいえない。それぞれの対象との関係は、それぞれの個人の持つ他の重要な対象がどのような機能を果たしているかと関連して決まるはずだからである。つまり、母親あるいは友人の機能がどの人にとっても同じであると仮定するには無理があるのである。個々人の人間関係の全体像を記述する工夫が必要である。

## 2. 「数人の重要な他者」から成る人間関係の測定

これまで、数人の重要な他者を測定しようといういくつかの試みがなかったわけではない。たとえば、ソーシャル・ネットワークの研究 (e.g., Barrera, 1986; Belle, 1989; 川浦ほか, 1996; Nestmann, & Hurrelmann, 1994; 浦, 1992; Rook, 1987) では、人が数人の他者を必要としていることが前提になっている。しかし、多くの研究ではソーシャル・サポートが全体として豊かか否かということに主な関心があり、それぞれの個人がどのような対象にどのような機能を振り分けているかといった関心は強くない。そこで、対象と機能とを積極的に関連づけて人間関係を測定しようという二つの試みを検討してみよう。

### a. Convoy model

Antonucci らの「ソーシャル・ネットワーク質問票」(Antonucci, 1985) は、コンボイ (convoy) モデル (Kahn & Antonucci, 1980) に拠っている。これは、母艦が数隻の護衛艦船団 (convoy) に守られているように人は複数の人との関係を維持して暮らしているとして提案されたものである。このモデルでは複数の重要な他者を同時に問題にし、それらの他者が心理的機能の重要さの程度が異なる集合を作り、しかもそれは階層構造をなしていると仮定している。このモデルに基づく測度として Antonucci が提案している質問票では、まず、Fig. 1 のような 3 重の同心円を使って、もっとも重要な者から 3 番目に重要な者までが誰であるか、それぞれの円に該

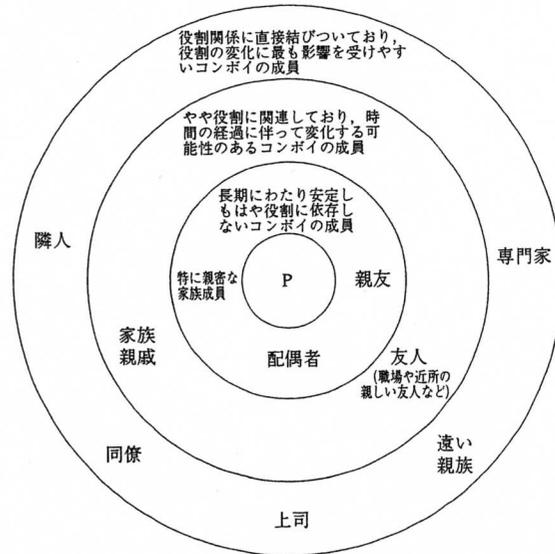


Fig. 1  
Convoy modelによる面接で使われる図版と予想されている結果  
(Kahn & Antonucci, 1980)

当する対象を何人でも具体的に挙げさせる。次に、挙げられた初めの10名の対象について、それぞれの属性、関係、心理的機能を詳しく尋ねる。全体で1時間程度の構造化された面接になる。これによって、それぞれの個人がどのような階層的ネットワークを持っているかについての豊かな情報が集められることになる。

Antonucciらは中高年を対象に研究を始めたが、この3重の円でネットワークを測定するという方法は幼児から高齢者までに使えるという利点があり、実際に、日本を含めさまざまな国の幼児から高齢者までの資料が集められつつある (e.g., Lang & Carstensen, 1994; Levitt, Weber, & Guacci, 1993)。そして、どの年齢でも、どの文化でも3円の人数を合計すると10名内外があげられること、家族が第一の円に挙げられる傾向があること、第一の円の対象にはすべての心理的機能を割り振られていること、などが報告されている。

ただし、実際に筆者が試みるといくつかの問題があることがわかった。まず、Fig. 1のような絵を使う測度であるために物理的な距離 (同居しているか否かなど) が心理的距離と混同されやすい、挙げられた対象が現実に重要な場所を占めているのか、あるいは、願望であるのか定かではない、そして、実施の仕方や教示によって挙げられる人数が影響される (たとえば、熱心に記入したり、面接時間が長いと人数が増える) などである。しかし、同じモデルでさまざまな年齢の人々を測定できることは大きな魅力であり、また、複数の他者からなるネットワークの詳細を記述することには成功しているといえるであろう。

だが、この方法によってとらえた個々人の人間関係についての豊かな情報をどのように要約して個人の人間関係の特徴とするのであろうか。このモデルの利点を活かした分析の工夫はこれからだと思われる。現在までのところ、挙げられた人数とその内容 (たとえば、家族や友だちの割合など)、それぞれの円でどのような機能が多く挙げられたか、あるいは、家族または友だちに割り振られた心理的機能はいかなる種類であったかなど、被面接者全体の傾向の報告にとどまっている (e.g., 秋山, 1997; Antonucci & Akiyama, 1987; Antonucci & Jackson, 1987)。

#### b. Social network matrix

Lewisらは、対象と機能の両者を考慮してFig. 2のようなソーシャル・ネットワークのマトリックスを考えている (Feiring & Lewis, 1991; Lewis, 1982; Lewis & Feiring, 1979)。このモデルでは行 (対象) と列 (心理的機能) とを増やすことによって無限に大きなマトリックスを描くことができる。この方法はたとえば小学生でも、多数の対象にそれぞれの心理的機能を割り振っているという実態を描き出すことに成功している。そして、現在までのところ、この方法によってそれぞれの年齢の子どもが一般にどのような対象を必要としているかなどの分析がなされている。しかし、各個人のソーシャル・ネットワークの特徴をどのように要約するかについて

は未だ報告されていない。

		Social functions					
		F <sub>1</sub>	F <sub>2</sub>	F <sub>3</sub>	F <sub>4</sub>	F <sub>5</sub>	F <sub>n</sub>
		Protection B <sub>11</sub> B <sub>12</sub> B <sub>13</sub>	Caregiving B <sub>21</sub> B <sub>22</sub> B <sub>23</sub> Feeding, changing	Nurturance B <sub>31</sub> B <sub>32</sub> . . . Rock, kiss	Play	Exploration/learning	B <sub>n</sub>
Social objects	P <sub>1</sub>	Self					
	P <sub>2</sub>	Mother					
	P <sub>3</sub>	Father					
	P <sub>4</sub>	Peer					
	P <sub>5</sub>	Sibling					
	P <sub>6</sub>	Grandparent					
	P <sub>7</sub>	Aunt					
	.	.					
	.	.					
	P <sub>n</sub>						

Figure 2  
ソーシャル・ネットワークのモデル (Lewis, 1982)

## II 愛情の関係の測定

### 1. 愛情の関係モデル

筆者が提案してきたのは上記の欠陥を克服し、複数の他者からなるネットワークを記述するとともに、個人のネットワークの特徴をも記述する、愛情の関係モデル (Affective relationships model) とそれにもとづく測定具 (ARS と PART) とその分析法である (高橋, 1973 ; Takahashi, 1974 ; 1990a ; Takahashi & Sakamoto, 2000)。

#### a. 愛情の関係とは

愛情の関係 (affective relationships) とは、人間関係の中心部分において、複数の重要な他者 (significant others) と結びつきたいという愛情の要求 (affective need) にもとづく人間関係である。愛情の要求は社会的な存在である人間が生存を確保するために生得的に備え持ち、生後間もなく

から観察され、社会文化的制約によって確実に出現するもので、人間に普遍的に見られる。人間は誕生から生涯にわたって、この愛情の要求を持ち、これによって他者と結びつく。具体的には生存や自己の存在を確保するために他者から援助を求め、喜びや悲しみの感情、あるいは、情報を他者と共有し交換し合い、また、他者に愛情を与える。このように、他者との関係は一方的に相手から愛情を求めたり、もっぱら相手に援助を与えたりするわけではなく、いわゆる“持ちつ持たれつ”の関係であると捉える方が、日常の人間関係にあっているといえるであろう。したがって、ここでいう愛情の関係とは従来の研究が、信頼 (trust)、愛着 (attachment)、愛情 (love)、身近な関係 (close relationships) などとして扱ってきた、親しい他者とのポジティブな関係の多くを含む概念である。どのような対象といかなる関係を持つかについては、さまざまな状況の変化や加齢につれて変容するものの、ある期間は安定していると予想される。このような中心的な人間関係が頻繁に変動するようであれば安定した精神状態ではいられないからである。

#### b. 人間関係についての表象

生存や精神的安定を確保するための愛情の要求を、効率よく充足しようと人間は愛情の関係についての枠組みを構築すると考えるといよいであろう。すなわち、この枠組みは現実の行動の束というよりも、こうであって欲しい、こうしたいという関係についての主観的な表象 (subjective representation) として、われわれは持つ。そして、この表象に基づいてある状況での対人行動がなされると仮定できよう。この愛情の関係の枠組は次のような3つの性質を持つ愛情の関係モデルで記述できる。

- ① それぞれの個人は多様な心理的機能を割り振りながら、自分にとって重要だと選んだ複数の対象からなる枠組みを構築している。
- ② この枠組みは階層的な構造をなしている。すなわち、各対象への心理的機能の分配にはいざという事態での効率からいって偏りがあり、

どの対象か（ひとり、あるいは、ごく少数の対象）が相対的に多くの機能を割り振られ、“中核的な対象”（focus or foci）となっている。この focus には他の対象に比べて、存在にとっての重要な機能をより多く割り振られているという特徴がある。さらに、focus ほどではないが重要な対象、またさらに、より重要度が少ない（存在を支えるという意味では周辺のな）機能を果たすより多くの対象といった構造をなしている。

- ③ この枠組みは精神的な安定を確保するためある期間は安定しているが、変容の可能性を持つ。すなわち、状況の変化（e.g., さまざまな対象との別れや出会い）や加齢（e.g., 個人の発達や変化、加齢に伴う社会的期待の変化）につれて変容する可能性が十分にある。一度構築された枠組みが次の出会いを媒介するために変容の可能性は制約されてはいるものの、人間は生涯をとおしてこの枠組みを変容させていく。

この愛情の関係の枠組みを記述する道具が ARS であり、質問票形式である ARS の実施が困難な、子どもと一部の高齢者用として開発されたものが図版式の PART である。

## 2. 愛情の関係スケール（ARS, Affective Relationships Scale）

### a. ARS の特徴

#### a-1. 3 要因によって記述する

ARS は愛情の関係の枠組みを次の 3 要因によって記述する。

- ① 愛情の要求を向ける対象：調査対象の属性に合わせて、愛情の要求の対象として 6～8 名を研究者が限定し、可能な限りすべてについて回答させる。未婚者であれば、母親、父親、もっとも親しいきょうだい、同性のもっとも親しい友人、異性の友人でもっとも好きな人、尊敬する人、そして、既婚者の場合には配偶者、子どもなどに

についても評定する。

- ② 愛情の要求が目的とする心理的機能：6 つの機能を測定する。1. 近接を求める；2. 情緒的支えを求める；3. 行動や存在の保証を求める；4. 激励や援助を求める；5. 情報や経験を共有する；6. 養護するの 6 種であり、理論的には 1→6 の方向にむかって、より存在を支えるという点で周辺のな機能になる。
- ③ 愛情の要求の強度：愛情の要求について自分にあてはまる程度を 5 段階（5：そう思う→1：思わない）で評定することによって、強度を測定する。

ARS は前記の Antonucci らや Lewis らの測定具とは次の 2 点において異なっている。第一に ARS では現実の対人行動ではなく、要求を測定することである。そして、第二は対象を親しい数人に限定し、また、心理的機能も上記の 6 種に限定して回答させる点である。つまり、ARS は 6 種の心理的機能を目的とする愛情の要求を記述する 12 項目（6 機能 x 3 項目）を用いて、6～8 人の対象について、独立に、繰り返し 5 段階で評定させるという方法で、「対象」と「心理的機能」とを一对にして測定するように工夫したものである。ARS によって、どのような対象を選び、それぞれにどのような機能を、どの程度の強さで、割り振っているかによって、個人の愛情の関係の枠組みを、表象として記述するのである。

#### a-2. 愛情の関係の種類

ARS では愛情の関係の枠組みの特徴を類型で特定する。すなわち、相対的に愛情の要求がもっとも強く向けられた対象“中核的な対象（focus）”に注目することを提案している。この focus が愛情の関係の枠組みを特徴づけるという仮定に拠って、これが誰かに注目して愛情の関係の型を特定する。

このような愛情の関係モデルとそれに基づく ARS は筆者のこれまでの多くの研究によって検討されてきたものである。すなわち、筆者自身や共同研究者による数十の研究における数千の調査協力者のデータ、そして、他の研究者による多くの追試研究を集約したものである。これについては別に記したのでここでは繰り返さない (c.f., Takahashi, 1990a ; Takahashi & Sakamoto, 2000)。

b. ARS の尺度としての検討

ARS の妥当性については3つの研究によって検討され、すでに別の論文 (Takahashi & Sakamoto, 2000) で詳しく述べたのでここでは要約するにとどめる。まず、ARS の construct validity が CFA (confirmatory factor analyses) によって検討され、6つの心理的機能を分けて扱う6因子モデルがもっともよくデータにあてはまることが確かめられた。加えて、この12尺度の対象別の分析では、ARS はひとつの大きな因子で構成されていることもわかった。この結果、ARS によって2種の得点を取り出せることになった。第一は対象別の総合得点 (対象別の12項目の合計点) で、第二は各対象別の心理的機能別の下位得点 (対象別の6機能別の得点) である。

また、対象と心理的機能とがいかに係わっているかについても分析された。Fig. 3にみるように、大学生女子を全体として見ると、同性の友人、異性の好きな人のARS点が家族 (両親、きょうだい) のそれよりも大であるが、とくに、“近接を求める機能” で高いこと、しかし、“養護する機能” はすべての対象に対して高いことが確かめられた。

さらに、convergent validity と discriminate validity が確かめられた。すなわち、Table 1に示したように、ARS の対象別の得点と理論的に関連するであろうと思われる尺度との有意な関連が確かめられた。

そしてさらに、ARS が中学生から成人にまでの男女に適用できるかが、中学生、高校生、大学生、中年成人の4群、計約1,400名のデータによってたしかめられた。その結果、男性のARS点は女性に比べてほとんどの

Fig. 3  
大学生女子における対象別の心理的機能得点 (Takahashi & Sakamoto, 2000)

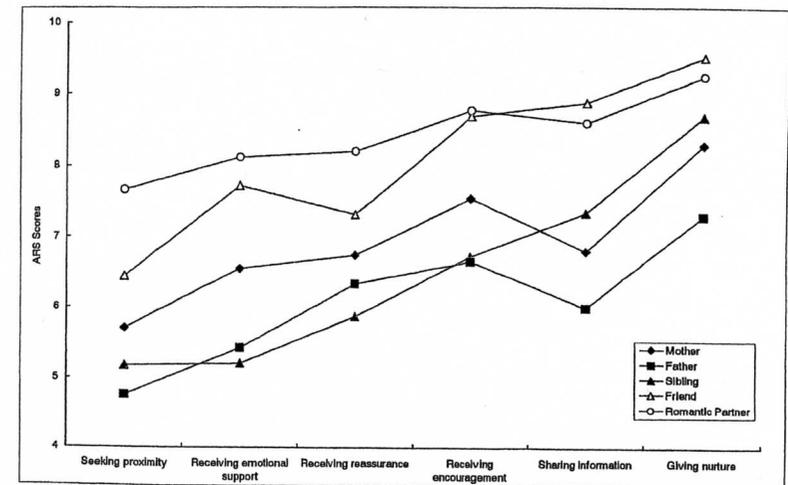


Table 1  
ARS 点と他の心理的尺度点およびコンボイの第一の円に出現した傾向との相関係数 (Takahashi & Sakamoto, 2000)

Measure	ARS Score				
	Mother	Father	Sibling	Friend	Romantic Partner
<i>Psychological measure</i>					
Social desirability	.03	.18	-.00	-.06	-.00
Loneliness	-.26*	-.27*	-.21*	-.32***	-.23*
<i>Affiliation to:</i>					
Mother	.70***	.50***	.38**	.24**	.22*
Friend	.22*	.25*	.20*	.46***	.17
Self-efficacy with Friend	.17	.10	.20*	.33***	.21*
<i>Appearance in the 1st circle of convoy</i>					
Mother	.35***	.10	.17	.17	.11
Father	.14	.33***	.17	.10	.09
Sibling	.06	.14	.26**	.20*	.23*
Friend	-.03	-.02	-.05	.13	.05
Romantic partner	-.19*	-.17*	-.11	.01	.20*

\*p < .05; \*\*p < .01; \*\*\*p < .001.

対象について有意に低いものの、男女ともARS点が加齢につれて減少することはなく、仮説どおり、どの年齢群でも一貫して愛情の要求が見られた。中学生以上では家族よりは家族以外の対象のARS点が高く、特に異性でもっとも好きな人、あるいは、配偶者の得点が加齢とともに高くなっ

ていく。家族に対する得点は高くはないが一定していて、成人でも、男性でも重要な対象であり続けていることが注目される。これらの結果は、Carstensen (1987) が UC-Berkeley 校の縦断データを分析して、年齢につれて重要だとされる対象が変わってくることを指摘した分析結果とも一致している。

そして、対象と心理的機能との関連については、たとえば母親について見ると、中学生では“近接を求める機能”が優勢であるのに対して、大学生以降では“養護する機能”が優勢になるなど、同じ対象について割り当てられる機能が加齢にもなって変化することが確かめられた。

以上のように、ARS によって中学生から成人までの男女が、数人の親しい人との人間関係をどのように構築しているかを記述することができる。

### c. 愛情の関係の型についての検討

前述のように ARS によって、個々人の回答を類型にわけてみることを試みている。すなわち、現在のところ、数人の重要な他者の中で、もっとも総合得点の高い対象 (top figure) に注目して、類型にわけける方法を用いている。それは、以下の少なくとも4つの根拠からである。

第一は、個人差をどのように扱うかという理論的な問題である。ARS ではこれを類型でまとめる方法をとる。類型は、個々人のデータをそのまま扱う個別・事例研究的な処理法と、よくなされているような (たとえば対象別の得点の平均値で) 全体の傾向をまとめて処理する方法との中間のそれだといえよう。すなわち、可能な限り個々のデータ全体を活かしながら、しかし、一般的な傾向の中にも位置付けてみる方法である。前者では個人のデータを活かそうとするあまりデータの複雑さに圧倒されるであろう。しかし、だからといって、一括してしまう (たとえば、ネットワークの人数の平均や、家族の占める割合を出す) のでは、現実の人間関係の複雑さを十分には記述できない。

そこで、ARS では、類型を使うことを提案している。周知のように、

個人差を patterns, syndromes, types などという用語によって区別しようという発想は特に新しいものではない (e.g., Eysenck & Eysenck, 1985; Gjerde, Chang & Kremen, 1998; Winter & Barenbaum, 1999)。類型化には個人差を全体の特徴として記述したいという共通の狙いがあると思われるが、実際には類型化といってもさまざまなものがある。たとえば、Jung (1921/1971) のように量的な連続性を仮定してすべての人間を分類するという方法もあるし、attachment patterns のようにある行動傾向のみに注目して類型を特定するものもある (Ainsworth et al., 1978)。さらには、Q-技法やクラスター分析のような統計的手法による類型化も考えられる。愛情の関係の類型は上述のように、相対的に誰が優勢であるかに注目して分類するもので、分類された型には質的な差異は想定するが優劣は仮定していない。

第二は実証的な根拠である。すなわち、上述のように ARS のデータを性や年齢で群に分けてまとめてみれば、それなりに“一般的な傾向”が見られはするが、個々人のデータは実際には多様である。個人は上述の“一般的な傾向”に見るような社会文化的な期待のもとで、しかし、自己のおかれている事情 (たとえば、親が健在か、パートナーがいるか、子どもがいるか) や自己の生き方や好みなどを総合して、自分にもっとも適当で、自分が必要としている対象を選択的に決めていると推察された。しかも、その際に、重要な他者として選ばれた数人の中で、ほとんどの心理的機能を割り振られる最も重要な対象 (focus) と、いずれかの機能を果たす相対的には重要度の少ない対象というような、階層的な構造が確かめられた。

第三には、われわれの幼児から高齢者までの多様な人々を協力者とした先行研究が、top figure によって特定した類型間に、さまざまな行動の差異があることを示したためである (e.g., 井上・高橋, 2000; 高橋, 1973; Takahashi, 1986; 1989; Takahashi & Majima, 1994; Takahashi, Tamura & Tokoro, 1997; Takahashi & Yokosuka, 1997)。さらに、第四に、類型にはある期間での安定性が見られることである (e.g., 井上・高橋, 2000; 濱之上, 1997; Ta-

kahashi, 1990b)。

#### d. ARS の実施法と分析の実際

##### d-1. 実施について

ARS は 12 項目からなる、自己報告的な質問票形式のスケールで、集団でも実施は可能である。具体的な項目については Appendix 1 を参照されたい。実施所要時間は 40～60 分で、中学生から高齢者までに適用が可能である。ARS を実施する調査対象の状況に合わせて、そのほとんどの人にとって重要な対象となるであろう 6～8 名について、対象別に独立に評定させることが特徴である。

評定する重要な対象としては、中学生から大学生であれば、母親、父親、もっとも親しいきょうだい、もっとも親しい同性の友だち、異性の友だちでもっとも好きな人、尊敬する人、そして、この 6 人の他に重要な人があればその人、が適当な対象である。また、既婚者であれば、「異性の友だちでもっとも好きな人」の代わりに配偶者あるいはパートナーについて、また、子どもがいれば子どもについて評定させることが必要である。実施上の都合があっても、最低 5 種の対象について回答させなければ ARS の特徴は活かさないことを強調しておく。

いずれの場合にも、評定の際には友人一般や、きょうだい全部、子ども全体というような漠然とした対象についてではなく、そのカテゴリーの中のもっとも重要な特定の誰かを定めて評定させることが重要である。子どもが数人いる場合にはどの子どもについて評定するかについて親が逡巡することがあるが、一般には「もっともあなたが頼りにしているお子さんについて」という教示が有効である。また、研究や臨床の対象になっている子どもについて評定させることが必要な場合もあろう。さらに、研究や臨床などの目的によっては、「父母が健在ではなくとも仮定して答える」、あるいは、「異性の友だちが実際にいなくても“いれば”と仮定して答える」ことも有効である。

##### d-2. 分析について

ARS 点では、①対象別の合計得点と②対象別の心理的機能下位得点の 2 種が使える。前者によって最も得点の高い対象 (top figure) に注目して、愛情の関係の型を特定する。そして、後者によって、その対象がどのような意味で重要であるかが推察できる。前述のように 6 つの心理的機能にはより中心的なものと同期的なものが区別される。

類型の識別は以下の手順で行う。まず、あまり人間関係に関心を示さない型、Lone wolf 型を特定する。これは、Lone wolf 型が心理的適応点が他の型よりも有意に低く (井上・高橋, 2000; Takahashi, Yokosuka & Tokoro, 1997), また、生活史の語り方も異なること (Takahashi, 1986; 高橋・飯田, 1998; Takahashi, Iida, & Tokoro, 1999) などから、特に区別して扱う必要性が示されたためである。

すなわち、上記①の対象別 ARS 点の最高得点が 36 点以下の場合に、人間に関心を持たない、あるいは、持っていないと判断して、これを Lone wolf 型とする。そして、残りの型は ARS 点の各対象別の合計点の中でもっとも高い top figure を、愛情の関係の枠組みの特徴を代表する対象と見做して、その対象によって型を特定することになる。たとえば、母親の ARS 点が 6～8 人の中で最高点であれば母親型とする。これまでのデータの中から、top figure によって分けた型の出現の様子を Fig. 4 に示した。なお、top figure がふたりの場合の Tie-type, 3 人以上の場合の Multiple-type を区別することも可能である。Fig. 4 ではすべてその他 (Others) としてまとめている。この図では Lone wolf 型も Others に含めている。これまでのわれわれのデータでは、どの年齢群でも Lone wolf 型は 1 割前後見られる。

ARS 点の top figure が真に中核的な対象 (focal figure) と見なせるか否かについて確かめる方法としては、第一にはその対象の心理機能下位得点のうち、近接を求める機能と心の支えを求める機能の得点が、2 位以下

高橋恵子

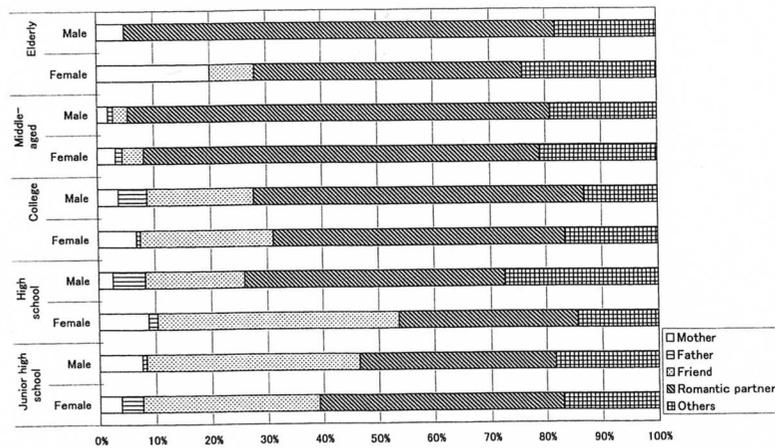


Fig. 4

中学生から高齢者までに見られる Affective types

の対象に比べて高いこと、また、第二に Appendix 2 に示したような ARS-SCT の記述に出現するかをみるとよい。さらにまた、類型によって発達の特徴を見る際には、1 か月程度の間隔をおいた 2 度の測定によってより安定した類型を見出すことも必要である。

### 3. 絵画愛情の関係テスト (PART, Picture Affective Relationships Test)

#### a. PART の特徴

質問票形式の ARS の実施が困難な幼児、小学生、さらに、時には高齢者のために上述の項目を絵で表わした PART (Picture Affective Relationships Test) (幼児版: PART-YC, 小学生版: PART-SC, 高齢者版: PART-EL のそれぞれに女性版, 男性版がある) を作成した (Takahashi, 1978~2000; Takahashi, 1990a)。PART は ARS と同じ理論に拠っている。すなわち、愛情の要求が (1) どの対象に向けられているか, (2) 6 つの心理的機能のどれが重要か, (3) 要求の強さはどの程度かの 3 要因によって、愛情の関係の枠組み (表象) を記述するという原則は同じである。

PART では ARS で問題にした 6 つの心理的機能を図版で表現している。

それぞれが 3 枚ずつ合計 18 枚の図版で構成される (ただし、幼児版では「養護したい」という機能を除いた合計 15 図版で構成されている)。PART では ARS とは異なり必要とされる対象を挙げさせるという方法をとっている。これはひとえに実施のしやすさという点からである。すなわち、Appendix 3 のそれぞれの図版の点線部分に「もっともだれが来てほしいか」を問う。それぞれの心理的機能を果たして欲しい対象を聞く、つまり、ARS と同じく対象と心理的機能とを結びつけてたずねるところに特徴がある。18 (幼児用では 15) 枚の図版中それぞれの対象が何度挙げられたかで、その対象に対する要求の強度を測ることができる。そして、それぞれの対象の強度を比べることで、どの対象が相対的に優勢か (top figure か) を見て、枠組みの型を特定する。

#### b. PART の信頼性と妥当性

幼児版 (PART-YC) についての信頼性は 5, 6 歳児について、2 週間後の再テストによって検討した。もっとも多く選ばれた対象で型を分類したところ、型の一致率は 65% であった (Takahashi, 1997)。妥当性については、教師評定によって友だち型の子どもは母親型の子どもに比べ、幼稚園における仲間との交渉が活発で、幼稚園での行動がより適応的であること (鈴木・永田, 1983)、また、実験場面では母親型と友だち型の子どもの行動が異なり、PART による愛情の関係の類型と一致した行動の差異が見られることがたしかめられた (松井, 1989; 鈴木・永田, 1983; 鈴木, 1991; Takahashi, 1986; 1997)。

小学生版 (PART-SC) の信頼性については、小学 5 年生で検討したところ、2 週間後にも同じ対象が選ばれる相関係数の平均は  $r = .70$  ( $p < .01$ ) であった。また、もっとも多く選ばれた対象で分類した型の一致率は 72% であった。さらに、妥当性については、PART による愛情の関係の型の特徴と教師評定による行動の評価がよく一致していることがたしかめられた (井上・高橋, 2000)。

さらに、高齢者版ではPARTによって分類される愛情の関係の型の高齢者が、型から予想される行動をするかをテストや質問紙に回答するかによって検討したところ、型間で有意な差異があることが確かめられた (Takahashi, Tamura, & Tokoro, 1997; Takahashi & Yokosuka, 1997; Takahashi, Iida, & Tokoro, 1998; 1999)。また、高齢者 (65-79歳) を対象にPART-ELとARSとの一致度を検討した (Takahashi & Tokoro, 1999)。その結果、87%がPART-ELとARSによって同じ型に分類されることがたしかめられた。

### c. PARTの実施と分析

#### c-1. PARTの実施

PARTは個別面接で実施される。調査対象者の性別と図版の性とが一致するように女性用か男性用かいずれかのセットを用いる。図版を一枚ずつ見せながら、「絵の中の人物(子ども)を自分だと思って下さい。それぞれの場面の点線の部分に、もっともきて欲しい人はだれですか」とそれぞれの図版の教示にしたがって尋ねる。ただし、友だちやきょうだいをあげたり、固有名詞をあげたりした時には、それが誰であるかを聞く。

なお、幼児版は3歳6か月前後から実施が可能である。それよりも幼い乳幼児については、子どもをよく知る養育者から情報を得ることができる。また、小学生版ではPARTの集団版も用意されている。これにも女子版と男子版とがある。高齢者の場合にもARSが使える時にはARSの方が情報量が多いという点でよいと思われる。しかし、さまざまな理由で実施が困難な場合にはPART-ELが便利である。PARTの実施には幼児から高齢者まで10~20分を要する。

#### c-2. PARTの分析

それぞれの対象に対する要求の強度はその対象が何枚の図版で挙げられたかで見える。また、その対象がどの図版で挙げられたかをみることで、そ

の対象の心理的機能が推察される。Appendix 4に見るように、それぞれの図版には6つ(幼児版では5つ)の心理的機能が描かれている。

愛情の関係の類型の特定はARS同様どの対象にもっとも愛情の要求が強く向けられているかに依る。まず、18枚の図版中の(半数以上の)9枚以上の図版で、「じぶん」、「ひとり」、「だれでもいい」、「わからない」と答えた者をLone wolf型とする。次に、残りの者の内、18枚のカードの中でもっとも多く選ばれた対象を優勢な対象(top figure)とみなしその対象の型とする。たとえば、母親がもっとも多く選ばれたものを母親型とする。ただし、もっとも多い対象のカードが、「じぶん」、「ひとり」、「だれでもいい」、「わからない」の場合、あるいは、もっとも多い対象が4枚以下の者、および、最多のカードが5枚以上であっても、最多のカードの対象が同数で2人以上の場合はどの対象が優勢であるかを決めるのは難しいとして分類不能とする。われわれのデータでのタイプの出現の様子はFig. 5とFig. 6のとおりである。なお、ARSと同様に型の特定をより確かにするためには、PART-SCTを併用したり、1か月間隔で2回の測定を実施し、一貫した型を見ることをすすめたい。

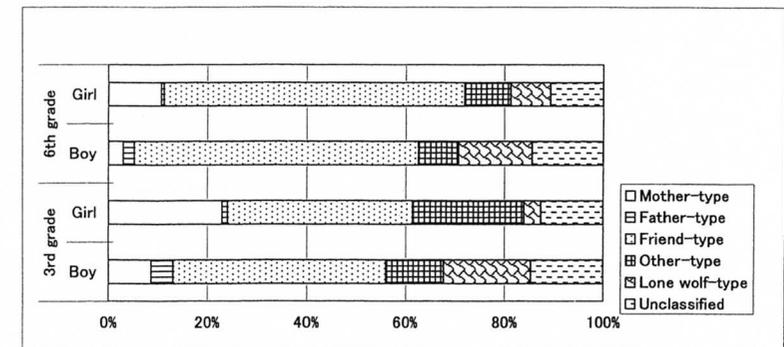


Fig. 5  
小学生に見られる Affective types

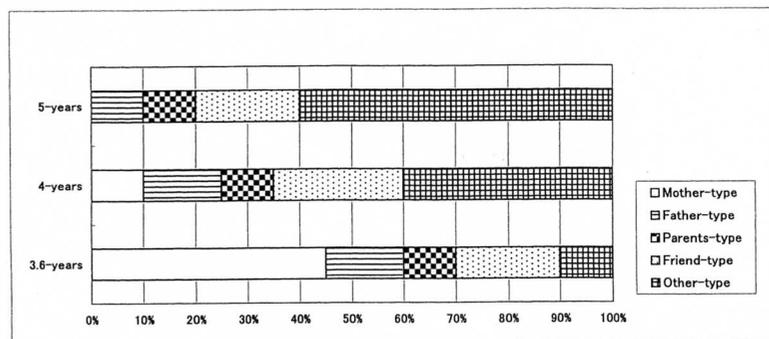


Fig. 6  
幼児に見られる Affective types

### III おわりに

#### 1. ARS と PART の特徴

本稿では愛情の関係モデルにもとづいて筆者が開発してきた ARS (Affective Relationships Scale) と PART (Picture Affective Relationships Test) について述べた。ARS と PART とを使うことによって、乳児から高齢者までのそれぞれの個人が持つ人間関係の枠組みについて、同一のモデルによって記述できる。

この測度は、これまでの測定具の持つ3つの困難を克服しようと開発したものである。

第一は、これまでの人間関係の測定具が、特定の他者による特定の機能のみを扱うという、“現実離れた”困難をいかに克服するかという問題である。これは Lewis (1984) が “beyond the dyad” と必要性を指摘した問題である。ARS と PART では、人間関係の複雑さを記述するために、“対象” と “心理的機能” を限定し、それぞれの対象について同じ尺度で繰り返し評定させることによって、それぞれの個人が、どのような他者を、なぜ、どの程度、必要としているかが測定されることになったのである。

第二の問題は、個々人の人間関係の特徴を何によって代表させるかという問題である。この測定では類型を用いる。いくつかの試みの結果、現在では top figure によって類型を特定している。操作的には単純な方がよく、top figure は類型化の近似的な指標だと考えている。しかし、すでに述べたように、類型の差に注目したい実験や臨床的な判断の際には、さらに、補充する分析や資料を用いた方がよいと思われる。第三の問題は、これまでの測定具が年齢で分断された状態で開発されてきたために、生涯発達を見る時の不便さをいかに克服するかという問題である。ARS と PART はそれを乗り越える工夫をしたものである。

#### 2. ARS と PART と社会文化的要因

人間関係に性差があることはこれまでも指摘されてきたとおりである (e.g., 秋山, 1997; Furman & Buhrmester, 1992; Gjerde, 1993)。PART による小学生のデータ (c.f., Fig. 5) も性差を示している (井上・高橋, 2000)。また、すでに見たように ARS の結果も女性の方が得点が高いし、また、類型の出現傾向も男女が異なることを示している (c.f., Fig. 4)。現在のところ幼児の資料では明らかな性差は見られない。いつから、なぜ性差が見られるようになるのかは興味ある問題である。

ARS と PART は海外の研究者によっても使われている。筆者と共同研究者も日米、日韓の文化比較研究で用いている (許, 2001; Takahashi & Lee, 1986)。日米の13歳以上の市民 (デトロイトと横浜市) の資料を分析してみると、日米では要求の強さを表現する程度が異なり、アメリカ人が日本人に比べ一貫してどの対象についても ARS 得点が高いことがわかった。これは、平均点の直接比較とする文化比較の危うさを示唆した。これに対して類型の出現についての文化比較は興味深く、有効であろうと思われる (Takahashi, Ohara, Antonucci, & Akiyama, in press)。

## 3. 今後の課題

もっとも興味をそそる課題は類型についてのものである。類型を何によって特定するかについては、これまでさまざまな試みを繰り返してきたが、top figure で特定することが単純でもあり、近似的にはこれでよいのではと考えるに到った。が、さらなる資料の蓄積が必要である。類型がどの程度安定しているか、また、変動するとしたらいかなる理由によるのかも興味深い問題である。この種の問題は人生の重要な移行期に見るのがもっともよいと思われる。進行中のいくつかの研究がいずれその一部を明らかにするであろうと期待している。

## 文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 秋山弘子 (1997). ジェンダーと文化: 男性と女性の社会的ネットワーク. 柏木恵子・北山忍・東洋 (編) 文化心理学: 理論と実証 (pp. 220-233). 東京大学出版会.
- Antonucci, T. C. (1985). Personal characteristics, social support, and social behavior. In R. H. Binstock & E. Shanas (Eds.), *Handbook of aging and the social sciences. 2<sup>nd</sup> edition* (pp. 94-128). New York: von Nostrand Reinhold.
- Antonucci, T. C. & Akiyama, H. (1987). An examination of sex differences in social support among older men and women. *Sex Role*, 17, 737-749.
- Antonucci, T. C. & Jackson, J. (1987). Social support, interpersonal efficacy, and health: A life course perspective. In L. L. Carstensen & B. A. Edelstein (Eds.), *Handbook of clinical gerontology* (pp. 291-311). Elmsford, NY: Pergamon Press.
- Belle, D. (Ed.) (1989). *Children's social network and social support*. New York: Wiley.
- Barrera, M. J. (1986). Distinction between social support concepts, measures, and models. *American Journal of Community Psychology*, 14, 413-445.
- Bowlby, J. (1969/1982). *Attachment and loss: Vol. I. Attachment*. New York: Ba-

sic Books.

- Cohen, S., & Wills, T. A. (1985). Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-317.
- Carstensen, L. L. (1987). Age-related changes in social activity. In L. L. Carstensen & B. A. Edelstein (Eds.), *Handbook of clinical gerontology* (pp. 222-237). Elmsford, NY: Pergamon Press.
- Carstensen, L. L. (1992). Social and emotional patterns in adulthood: Support for socioemotional selectivity theory. *Psychology and Aging*, 3, 331-338.
- Eysenck, H. J. & Eysenck, M. W. (1985). *Personality and individual differences: A natural science approach*. New York: Plenum.
- Feiring, C. & Lewis, M. (1991). The transition from middle childhood to early adolescence: Sex differences in the social network and perceived self-competence. *Sex role*, 24, 489-509.
- Furman, W. & Buhrmester, D. (1992). Age and sex differences in perceptions of networks of personal relationships. *Child Development*, 63, 103-115.
- Gjerde, P. F. (1993). *Depression symptoms in young adults: A developmental perspective on gender differences*. In D. C. Funder, R. D. Parke, C. Tomlinson-Keasey, & K. Widaman (Eds.), *Studying lives through time: Personality and development* (pp. 255-288). Washington, DC: American Psychological Association.
- Gjerde, P. F., Chang, R., & Kremen, A. (1998). *Pathways toward and away from depression: Predicting young adult outcomes from preschool characteristics*. Paper presented at the 7<sup>th</sup> Biennial Meeting of the Society for Research on Adolescence.
- 濱之上薫 (1997). 成人のソーシャル・ネットワークの構造. 聖心女子大学文学研究科, 修士論文.
- Hinde, R. A. (1981). The base of a science of interpersonal relationships. In S. Duck & R. Gilmour (Eds.), *Personal relationships I: Studying personal relationships* (pp. 1-22). London: Academic Press.
- 許今英 (2001). 「甘え」に関する韓国と日本の共通性と差異. 聖心女子大学文学研究科, 修士論文.
- 井上まり子・高橋恵子 (2000). 小学生の対人関係の類型と心理的適応: PARTによる検討. 教育心理学研究, 48, 75-84.
- Jung, C. G. (1923/1971). Psychological types. In H. Reed et al., (Eds.), *The col-*

- lected works of C. G. Jung, Vol.6* (pp. 1-495). Princeton : Princeton University Press.
- Kahn, R. L. & Antonucci, T. C. (1980). Convoys over the life course : Attachment, roles, and social support. In P. B. Baltes & O. B. Brim (Eds.), *Life-span development and behavior, Vol. 3.* (pp. 253-268). New York : Academic Press.
- 川浦康至・池田政子・伊藤裕子・本田時雄 (1996). 既婚者のソーシャル・ネットワークとソーシャルサポート—女性を中心に. *心理学研究*, 67, 333-339.
- Lang, F. R. & Carstensen, L. L. (1994). Close emotional relationships in late life : Further support for proactive aging in the social domain. *Psychology and Aging*, 9, 315-324.
- Levitt, M., Weber, R. A. & Guacci, N. (1993). Convoys of social support : An intergenerational analysis. *Psychology and Aging*, 8, 323-326.
- Levitt, M. J., Guacci-Franco, N., & Levitt, J. L. (1993). Convoys of social support in childhood and early adolescence : Structure and function. *Developmental Psychology*, 29, 811-818.
- Lewis, M. (1982). The social network model. In T. M. Field, A. Huston, H. C. Quay, L. Troll, & G. E. Finley (Eds.), *Review of human development* (pp. 180-214). New York : Wiley.
- Lewis, M. (1984). *Beyond the dyad*. New York : Plenum.
- Lewis, M. & Feiring, C. (1979). The child's social network : Social object, social functions, and their relationship. In M. Lewis & L. Rosenblum (Eds.), *The child and its family : The genesis of behavior, Vol. 2* (pp. 9-27). New York : Plenum.
- 松井澄子 (1989). 対人関係が物語り理解に及ぼす影響. 聖心女子大学卒業論文.
- Nestmann, F. & Hurrelmann, K. (Eds.) (1994). *Social networks and social support in childhood and adolescence*. Berlin : de Gruyter.
- Rook, K. S. (1987). Social support versus companionship : Effects on life stress, loneliness, and evaluations by others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 1132-1147.
- Sarason, I. G., & Sarason, B. R. (Eds.) (1985). *Social support : Theory, research and application*. Dordrecht, The Netherlands : Martinus Nijhoff.
- 鈴木ますみ・永田千春 (1983). 幼稚園入園に伴う対人関係の変容. 国立音楽大学卒業論文.
- 鈴木美夏 (1991). 幼児の対人関係の枠組みと問題解決場面での協同作業. 聖心女子大学卒業論文.

- 高橋恵子 (1973). 女子青年における依存の発達. *児童心理学の進歩*, 12, 255-275.
- Takahashi, K. (1974). Development of dependency among female adolescents and young adults. *Japanese Psychological Research*, 16, 179-185.
- Takahashi, K. (1978~2000). Manual of PART (Picture Affective Relationships Test). Unpublished manuscript.
- Takahashi, K. (1986). The role of the personal framework of social relationships in socialization studies. In H. Stevenson, H. Azuma, & K. Hakuta (Eds.) *Child development and education in Japan* (pp. 123-134). New York : Freeman.
- Takahashi, K. (1989). *Personal history differences between family pattern and agemate pattern affective relationships among female college students*. Paper presented at the meeting of the Society for Research in Child Development.
- Takahashi, K. (1990a). Affective relationships and lifelong development. In P. B. Baltes, D. L. Featherman, & R. M. Lerner (Eds.), *Life-span development and behavior, Vol. 10.* (pp. 1-27). Hillsdale, NJ : Erlbaum.
- Takahashi, K. (1990b). *Changes and stability in affective relationships of the late adolescence : A short-term longitudinal study*, Paper presented at International Conference on Personal Relationships. Oxford.
- Takahashi, K. (1997). *Friends vs. Mothers : The role of pre-established relationships in children's joint problem solving*. Paper presented at the SRCD meeting. Washington DC.
- Takahashi, K. & Majima, N. (1994). Transition from home to college dormitory : The role of preestablished affective relationships in adjustment to a new life. *Journal of Research on Adolescence*, 4, 367-384.
- Takahashi, K. & Lee, Y-J. (1996). *Are Japanese students similar to or distinct from Korean students in constructions of their frameworks of social relationships?* Paper presented at Society for Research on Adolescence. Boston.
- Takahashi, K., Tamura, J. & Tokoro, M. (1997). Patterns of social relationships and psychological well-being among the elderly. *International Journal of Behavioral Development*, 21, 417-430.
- Takahashi, K. & Yokosuka, A. (1997). *Type of affective relationships and psychological well-being*, Meetings of the Gerontological Society of America. Cincinnati.

高橋恵子・飯田亜紀 (1998). 高齢者の生活史にみる対人関係の変容. 日心 62 回大会, 29-30.

Takahashi, K., Iida, A. & Tokoro, M. (1998). *Type of affective relationships and psychological well-being among Japanese elderly adults ; Family-type vs. friend-type vs. lone wolf-type*. Paper presented at the 15<sup>th</sup> biannual meeting of ISSBD. Beijing.

Takahashi, K., Iida, A. & Tokoro, M. (1999). *Making sense of self : Personal stories among Japanese elderly adults*. Paper presented at 6<sup>th</sup> Asia/Oceania Congress of Gerontology. Seoul.

Takahashi, K. & Tokoro, M. (1999). *Assessing social relationships among elderly people*. Unpublished manuscript.

Takahashi, K. & Sakamoto, A. (2000). Assessing Social Relationships in adolescents and adults : Constructing and validating the Affective Relationships Scale. *International Journal of Behavioral Development*, 24, 451-463.

Takahashi, K., Ohara, N., Antonucci, T. C., & Akiyama, H. (in press). Commonalities and differences in close relationships among the Americans and Japanese : A comparison by the Individualism/Collectivism concept. *International Journal of Behavioral Development*.

浦光博 (1992). 支えあう人と人 : ソーシャル・サポートの社会心理学. 安藤清志・松井豊 (編) セレクション社会心理学 8. サイエンス社.

Weiss, R. (1974). The provisions of social relationships. In Z. Rubin (Ed.), *Doing unto others* (pp. 17-26). Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall.

Winter, D. G. & Barenbaum, N. B. (1999). History of modern personality theory and research. In L. A. Pervin, & O. P. John, (Eds.), *Handbook of personality : Theory and research 2<sup>nd</sup> edition* (pp. 3-27). New York : Guilford Press.

Appendix 1 ARS の教示と項目の例 (大学生版の母親の場合)

あなたの大切な人について考えてください。

たとえば、両親、きょうだい、祖父母、親戚、友人、恋人、婚約者、尊敬する人など、さまざまな人がいることでしょう。そのような人たちを思い出しながら、これからの間に次のように答えてください。

あなたとあなたにとって大切な人との関係について、あなたの気持が(そう思う ←→ 思わない) の5つのうちどれにあてはまるか、あてはまる程度の番号に○をつけて答えてください。

万一、その人が亡くなっている場合でも、あるいは、実在しない場合でも、あ

あなたが「もしもいたら」と想像して答えられるなら、なるべく答えてください。

1. あなたと母親との関係について答えてください。

選択肢	
5	そう思う
4	まあそう思う
3	どちらともいえない
2	あまりそう思わない
1	思わない

1. 母親が困っている時には助けてあげたい……………5	4	3	2	1
2. 母親と離れると心に穴があいたような気がするだろう5	4	3	2	1
3. 母親が私の心の支えであってほしい……………5	4	3	2	1
4. 悲しい時は母親と共にいたい……………5	4	3	2	1
5. つらい時には母親に気持ちをわかってもらいたい……5	4	3	2	1
6. 母親とは互いの悩みをうちあけあいたい……………5	4	3	2	1
7. 母親が困った時には私に相談してほしい……………5	4	3	2	1
8. 自信がわくように母親に「そうだ」といってほしい…5	4	3	2	1
9. できることならいつも母親と一緒にいたい……………5	4	3	2	1
10. なにかをする時には母親が励ましてくれるといい……5	4	3	2	1
11. 母親とは互いの喜びを分かちあいたい……………5	4	3	2	1
12. 自信がもてるように母親にそばにいてほしい……………5	4	3	2	1

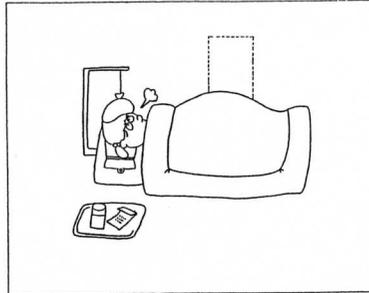
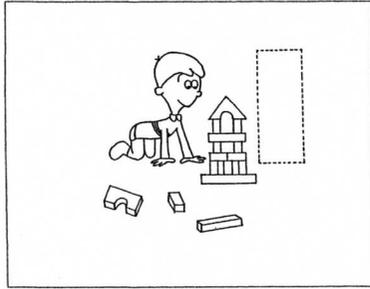
Appendix 2 ARS-SCT

あなたのありのままの気持ちを表すように書いてください。

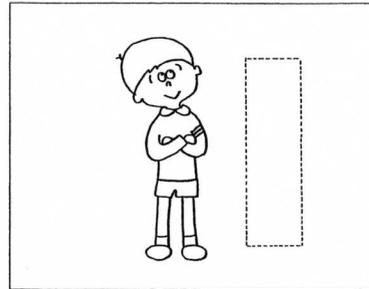
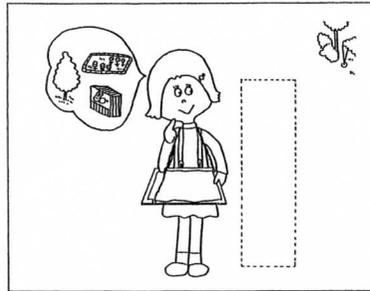
1. 私が心のよりどころにしているのは \_\_\_\_\_
2. 私がかもともたよりになっているのは \_\_\_\_\_
3. つらい時に、私の心の支えになるのは \_\_\_\_\_
4. つらい時に、まず私が思い出すのは \_\_\_\_\_
5. 父は、私にとっては \_\_\_\_\_
6. 母は、私にとっては \_\_\_\_\_
7. 親友は、私にとっては \_\_\_\_\_
8. 異性の友人でもっとも好きな人は、私にとっては \_\_\_\_\_
9. 神は、私にとっては \_\_\_\_\_
10. 私の生きがいは \_\_\_\_\_

## Appendix 3 PART 図版の例

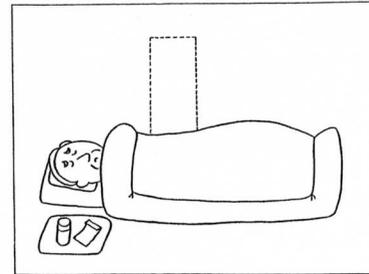
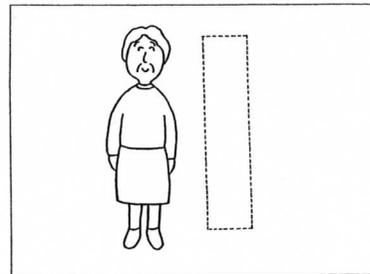
## 幼児版 (PART-YC)



## 小学生版 (PART-SC)



## 高齢者版 (PART-EL)



## Appendix 4 小学生版 (PART-SC) の教示

(以下の A さんには、被面接者の名前をいれる)

1. A さんが、家の中で遊ぶ時、だれと、もっとも一緒に遊びたいですか？
2. A さんが、怪我をした時、だれに、もっともそばにいてほしいですか？
3. A さんが、宇宙旅行に行くとしたら、だれと、もっとも一緒にいきたいですか？
4. A さんが、外で遊ぶ時、だれと、もっとも一緒に遊びたいですか？
5. A さんは、誰と一緒にいる時、もっとも安心な気持ちになりますか？
6. その人に嬉しいことがあったら、A さんがもっとも一緒に喜んであげたいと思う人はだれですか？
7. A さんが、学校の校庭で遊ぶ時、だれと、もっとも一緒に遊びたいですか？
8. A さんが、病気の時、だれに、もっともそばにいてほしいですか？
9. A さんが、レストランでごちそうを食べる時、おとなりに、だれにもっともすわってほしいですか？
10. A さんが、宿題で何を描こうか迷って決められない時、だれに、もっとも決めてほしいですか？
11. その人が困っていた時、A さんが、ぜひ相談にのって上げたい人はだれですか？
12. A さんが、学校で算数の問題が解けない時、だれに、もっとも教えてほしいですか？
13. A さんに、とても嬉しいことがあった時、だれに、一番知らせたいですか？
14. A さんが、本を見ていたらよく知らない花がでてきました。だれに、もっともそれでいいか確かめたいですか？
15. A さんに、とても悲しいことがあった時、だれに、一番そばにいてほしいですか？
16. A さんが、大切な宝物を持っているとしたら、だれにもっとも見せたいですか？
17. A さんが、学校で何をして遊ぼうかと迷った時、だれに、もっとも決めてほしいですか？
18. その人が困っていたら、A さんが、ぜひ助けてあげたい人はだれですか？

## 付記

ARS や PART の一部を用いたり、改変したりしないでください。

お問い合わせは下記をお願いします。

〒150-8938 渋谷区広尾 4-3-1 聖心女子大学心理学研究室 高橋恵子

E-mail : keiko-ta@fb3.so-net.ne.jp